

国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する問題背景 —外国人妻を中心に—

伊藤 孝恵

要 旨

本稿では、国際結婚夫婦のコミュニケーション上の問題を俎上に載せるにあたって勘考すべき問題背景を整理し、特に日本人との国際結婚のうち7割ほどを占める外国人女性にとっての夫婦間コミュニケーションの問題を探究した。その結果、夫婦が対等で双方にとって幸福感が得られる夫婦間コミュニケーションのためには、外国人妻を取り囲む社会全体の意識や制度の見直しとともに、コミュニケーションを行っている当事者同士の意識と行動の変革が求められるといえる。

【キーワード】 国際結婚、ジェンダー、コミュニケーション

1. はじめに

これまでの研究により、夫婦関係や配偶者への満足度、幸福感に関与する要因には夫と妻との間で相違が見られるとともに、夫婦間のコミュニケーションの重要性が指摘されている。生命保険文化センターの『夫婦の生活意識に関する調査』（1995）によれば、配偶者に対する満足度に与える影響力が最も高いのは、男女とも「コミュニケーション」であった¹。このことから、配偶者に対する満足度を高めるためには、男女を問わず夫婦間のコミュニケーションが最も大切な要因であるといえる(同:139)。

従来の理論的・実証的研究においても、良好な夫婦関係の維持にとって、肯定的なコミュニケーションを十分行うことの重要性が明らかにされており、国際結婚夫婦もその例外ではない。特に、互いの生まれ育った文化的背景の異なる国際結婚夫婦の間においては、ジェンダーに基づくコミュニケーションの違いばかりでなく、言語や価値観、習慣等の文化差も介在し、それらが時に双方の理解を妨げ、夫婦関係に亀裂を生むこともある。したがって、国際結婚夫婦においては、良好な夫婦関係の維持にとって、互いの感情や考え、習慣等を分かり合うためのコミュニケーションが一層求められるといえよう。

そこで本稿では、国際結婚夫婦のコミュニケーションを俎上に載せるにあたって勘考すべき問題背景を整理する。まず、日本における国際結婚増加の背景として、送り出し側のアジア諸国と受け入れ側の日本の社会的・経済的事情を述べる。次

に、日本人との国際結婚のうち7割ほどを占める外国人女性が日本社会において直面する諸問題を整理し、その中で言葉の問題についても見ていく。さらに、国際結婚を日本人同士の夫婦とは対照的な特異な存在としてではなく、日本に定住する夫婦として、主に日本の夫婦間コミュニケーションに現れる男女のコミュニケーションの問題について触れる。このように、外国人妻や国際結婚夫婦を取り囲み、なんらかの影響を及ぼしていると思われる日本の社会的・文化的問題を整理することにより、今後、国際結婚夫婦のコミュニケーション、特に外国人妻のコミュニケーションの枠を提示する礎とすることを、本稿の目的とする。

なお、「コミュニケーション」とは、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」（『広辞苑』第五版）であるが、本稿で扱う「コミュニケーション」は、言語的側面を主とする。また、日本人男性と結婚した外国人女性の抱える問題を取り上げた先行研究の中には、外国人女性の出身国や地域を限定したケーススタディがある。しかし今回は、出身国や地域を特定せず、日本で暮らす外国人妻（そのほとんどがアジア出身である²）を取り巻く日本内外の社会的・経済的事情や、彼女たちが共通に直面する日本社会の外国人、特にアジア出身者に対する日本人の意識やジェンダーの観念を問題として取り上げることで、在日外国人妻のコミュニケーションに関する全体的な問題背景を浮き彫りにすることを目指す。

2. 日本における外国人妻の諸問題

2.1 日本における国際結婚増加の背景

今日日本において増加、多様化している国際結婚の約7割が、「夫日本人、妻外国人」で、その外国人妻の多くは、フィリピン、韓国・朝鮮³、中国といったアジア諸国出身者である。その増加、多様化の背景には、国際的な人口の流動化とともに、送り出し側、受け入れ側の社会的・経済的事情がある。

日本における国際結婚増加の要因として、まず国際的な人口の移動に伴う接触機会の拡大が指摘されている。すなわち、国際的に人の流動が活発化するに伴い、他国の人と接触する機会が増え、その中でやがて結婚に結びつくケースも増えているということである。これに、日本の場合国内における外国人人口の増大が外国人との接触機会を増やし、結果として国際結婚を増加させるというより、むしろ外国人との婚姻が外国人人口の増加につながる逆の関係があるのではないかという指摘もある(原, 1996)。が、いずれにしても、人と人が出会い、接近するにはなんらかの接近要素が必要なわけで、国や文化の違いを超えた国際結婚の場合は特にそうである。この点について新田(1995)は「接近」理論の中で、住居的、職業的、教育的、娯楽的近似性・類似性が、人間関係を近づけさせると示しているが、グローバルなレベルでの外国人同士の接近の場合には、国内外の人口や社会的要因や国レベルでの経済格差なども関連してくることも併せて指摘している。送り出し側のアジア諸国の事情としては、一つには経済発展に伴う留学等の海外志向の高まりがある。しかしながら、葛(1999,2000)にあるように、日本との経済格差と、アジア諸国における貧困人口の増加と高い失業率による生存競争の激化、また個人主義や経済発展の不均衡による地域間格差と個人の所得格差に伴う人々の物的欲求と金銭志向への傾斜があり、これらによる海外、日本への移動志向が高まっていることも、プッシュ要因の一つであるといわれている。

一方、受け入れ側の日本の事情としては、都市のもつ求心力と何も持たない農村の遠心力(寺内1995)、晩婚化の進行と結婚率の低下、女性の結婚観の変化から、農村部の男性の嫁不足を招き、その救援策としてアジア人女性を求めると考え

られる。また篠崎(1996)は、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚の増加は、配偶者選択における「内婚」(自分が所属する集団の内から配偶者を選択する傾向)原理のうち、「国籍」という要素の規制が日本人の男性において急速に緩んだからだとし、それには男性の配偶者となる女性やその家族・社会に対しての「経済的優位性」「政治的優位性」のような要因があるという。

つまり、日本における国際結婚増加の背景としては、日本人女性の変わる結婚観と変わらぬ社会のジェンダー意識との狭間で生じた晩婚化と結婚率の低下が結婚人口の性別不均衡をもたらし、それが深刻な農村部ではこれを解消するため海外に女性を求め、昇婚を望むアジア人女性との間で思惑が一致したことも考えられる。

このように今日の日本における国際結婚の増加は、人々の出会いの場やきっかけの広がりと接近に伴うものであると同時に、結婚に対する日本男性の変わらぬ意識と、日本とアジア諸国との経済格差の上に成り立つものであるとも言えるだろう。外国人妻は、国家間の経済格差上にある差別意識や、日本社会・文化への同化圧力の中で、言葉や価値観、習慣等の違いに戸惑うばかりでなく、家庭内や親子間でのコミュニケーション・ギャップやエスニック・アイデンティティの揺らぎ、日本において依然根強い性別役割分業にも直面している。

2.2 性別役割分業

日本は依然、先進諸国の中でも性別役割分業が強く(松田 2000)。こうした日本社会の性別役割分業意識と現状は、日本人男性と結婚した外国人妻にとっても直面することである。日本と異なる性別役割分業意識を持っていたり、母国で遣り甲斐のある仕事に従事していた女性にとっては、夫が家事や子育てに非協力的であるのにストレスを感じるなど、「ジェンダー」という日本社会が一面として持つ「異文化」にもどう対処していくかが求められるのである。特にイエ制度や性別役割分業が根強い農村部に嫁いだ外国人妻は、農村自体の社会的・経済的問題や出産のプレッシャー、産前産後の休暇が取りにくいことなども含めた、日本人女性の離村の要因の一つでもある依然女性にとって生きづらい農村の現状の中、日本人女性の代わりにその役目を背負っていかねばならないという問題も、中澤(1997)などによって指摘されている。

2.3 外国人妻の言葉・コミュニケーションの問題

日本における外国人妻の問題や悩みとして最も多く挙げられるのが、言葉の問題である。公的機関や病院などでの説明の他、家庭内や職場、地域での生活、コミュニケーション言語のほとんどが日本語である。そのため欧米系出身者の場合、病院などで英語が話せる人が少ないなどの不満が聞かれるもの（秋武 1995）、英語の説明書や案内がある、夫婦間の言語はほぼ英語である、英語で仕事ができる、映画館やビデオなどでハリウッド映画が見られるなど、生活や周囲の人とのコミュニケーションが英語で済ませられることが比較的多い。けれども非欧米系出身者の場合、職場や地域、家庭において彼女たちの母語が尊重され使用される場面や機会は稀であり、日本語の使用を余儀なくされることがほとんどである。そのため、絶えず母語でない日本語を使用していかなければならない精神的負担や言語的不利益、母語が認められない寂しさや苛立ちといったものを抱えながら生きていくのは、アジアなどの非欧米系出身女性である。それに加えて、地理的に遠い、時間がない、家族の理解がないなどの理由で、日本語教室に通ったり日本語を学んだりすることが難しいケースも指摘されている（石河 2003, 鄭 1992）。

また、子どもとの言葉に関わる問題もある。子どもが父親・母親両方の言葉や文化をバランスよく身に付けた加算的バイリンガルやバイカルチュラルな存在になるためには、1)母親が外国人で、2)外国人の親の言語が一般的に使用できる威信のあるもので、3)家族がその外国の文化を保つ姿勢があることが条件であると言われている（嘉本 1992）。この点において、非欧米系の女性にとっては、彼女たちの母語が日本社会や日本人家庭で尊重され積極的に使用される環境になく、反対に日本語・日本文化の強制や同化、周囲のアジア蔑視などが相俟り、両親のもつ二つの言語・文化を継承させる視点で子どもを育てることが難しい現状にある。そのため中には、「日本人として」育てるよう日本人家族に強いられるケースや、日本に適應させるため自らの国の言葉や文化を伝えていくことをあきらめてしまうケースもある（石河 2003）。このように、外国人妻が非欧米系の場合、言葉の問題は自分自身の日本社会での適應に重く押し掛かるだけでなく、子育てや母親としての自

尊心にも大きな影響を及ぼしている。

2.4 その他

上記以外にも、外国人妻が直面する問題には、価値観・習慣の違い、日本社会の仕組みや事情に関する知識不足、母国との関係疎遠や宗教に対する周囲の理解不足などの問題など数多く挙げられている。これらの問題を来日後の時間経過とともに整理した論文や著書もあるが⁴、一環して言えるのは、これらの問題は、外国人妻が社会や家庭内で日本文化への同化を求められ、母語や自国の価値観・習慣等を無視あるいは差別され疎外されることに起因しているということである。また、夫の家事・育児への非協力や暴力などの問題行動についての悩みも報告されているが（葛 2000）、法的・社会的に離婚できにくい弱い立場のため、日本人夫と対等な関係が築けずただ耐えることを余儀なくされているケースも多く、法的な整備も求められている。

3. 夫婦間コミュニケーションにおける問題

3.1 夫婦間コミュニケーションと満足度

日本における国際結婚夫婦のコミュニケーションについて考える上で、国際結婚の問題からだけでなく、夫婦間のコミュニケーションの側面からも敷衍して見る必要があるだろう。国際結婚夫婦のコミュニケーションの問題を、言語や文化の違いによる齟齬に限って帰趨するのではなく、男性と女性のコミュニケーションの観点からも捉えなければ跛行的だからである。

A.Michel (1978) は、結婚に対する満足度と夫婦の目的の達成について最も決定的な諸要因の一つは、平等な夫婦関係に基づいた相互のコミュニケーションであると述べているが、コミュニケーションにおいては情報伝達のもつ他者への影響の側面こそが重要であり、良好な夫婦関係の維持にコミュニケーションは重要な役割を担っているといえる。

日本においては、「以心伝心」「一心同体」という言葉で表わされているように、伝統的な日本の夫婦の間には、明確な意思表示をせずとも互いに分かり合い信頼し合えるという認識が存在していたように思われる。しかしながら、近年、定年退職後の夫婦の結婚満足度を調査した袖井・都築 (1985) やデトロイトとの比較より東京の特徴を示した Blood (1967)、及び共稼ぎ夫婦における結婚満足度の諸要因を探った小澤 (1987) において

も、夫婦相互のコミュニケーションが、結婚満足度に重要な影響を及ぼしていることが示唆されている。神原（1992）は、「夫の場合にも妻の場合にも、パートナーとの間に強い一体化意識をもてるとともに、会話や外出などカップルとしての相互行為のチャンスが十分であるといった夫婦間のコミュニケーションが、夫婦関係満足度を高める上でとりわけ強い影響を及ぼしている」(P.64)と述べている。

ただし、長津（1987）によれば、夫婦間コミュニケーションの結婚幸福感に対する規定力は、男女ともに強いものの、その寄与の仕方が異なるという。女性では、その頻度の高いことがプラス、低いことがマイナス要因として働くのに対し、男性では、頻度の低いことがマイナス要因となることは女性と同じであるものの、プラス要因となるのはその頻度が中程度の時だというのである。つまり、夫にとって夫婦間のコミュニケーションが活発であることは、必ずしも結婚に対する肯定的評価に結びつかず、妻の一方通行の様相を帯びたコミュニケーションであることが窺い知れる。

難波（1999）によれば、妻の夫に対する不満には、「夫から優しい声かけがない」というレベルを超えて、「夫と共に育ち合いたい」「話し合いたい」という共感性を求めるものであるという。その一方で、怒る・黙る・席を立つ等によって会話を断つ、あるいは妻を斥ける・避けるという夫の行動に対し、それ以上夫に働きかけない・引き下がるという、相互交換による親密なコミュニケーションのある新しい夫婦関係を目指そうとしない態度も妻の間に一様に存在したという。ここには、夫婦関係のあり方に変化が求められつつも、黙して語らずの「男性らしさ」と、夫と対等な土俵に上がろうとしない・上がれない「女性らしさ」を踏襲するジェンダー規範が夫婦ともに依然存在していると考えられる。

長津・濱田（1999）では、性別役割分業について賛成の夫が多数を占める一方、妻の半数以上も肯定しており、役割アイデンティティが職業人などの社会的役割である場合は妻のディストレス（不安を引き起こさせるストレス、悩み）は高められ、反対に、妻・母親・主婦などの家庭的役割にある場合は低められるという知見が得られている。また、夫の抑うつ状態にも妻の抑うつ状態にも影響を与えるのが、「妻から夫への愛情」である

という結果（小田切ら 2003）もある。つまり、特に若年層では平等主義的志向をもつ傾向が指摘されているものの（鈴木 1996）、依然妻が家事や育児を一手に担い、夫との間で共感的・相互交換的なコミュニケーションを望みながらも、妻から夫へ一方的に働きかける夫婦の姿が浮き彫りになっている。

3.2 「文化差モデル」から見た男女のコミュニケーションの違い

「文化差モデル」とは、ジェンダーによる言語行動の違いを文化差と捉える考え方を指す（中村 2001）。このモデルの代表的な提唱者である Tannen（1990）は、異なる文化環境の中で育ってきた男女の間では、コミュニケーションで多くの摩擦が生じるものだとし、男と女の話し方の違いを整理・理解することでその誤解は解消されると述べている。したがって、男女はそれぞれ社会言語学的に下位文化を持っているというこの文化差モデルにおいては、文化に優劣や善悪がないように、男女の言語行動の差に優劣や善悪は存在しない。

Gray（1992）も、男女間で最もトラブルの元になりやすい価値観の違いや言葉の食い違い、気持ちのずれ違いを男女の文化差から生じるものと捉えている。例えば、ストレスに直面した場合、男性はストレスの種となっている問題を解決することにより気持ちを切り直すのに対し、女性はその問題に関して話すことによって気持ちを切り替えようとするという（Gray 1992）。同様に、夫と妻でコミュニケーション行動・態度に違いが見られることは他でも指摘されており（Turner L.H., Dindia K., Pearson J.C 1995, Lafrance M., Brownell H., Hahn E. 1997）、男性より女性の方が、相手に対し直接的な言動で応答している一方で、攻撃的な言動や会話の不適切な中断は相互的な共同作用において認めない傾向にあること（Bresnahan & Cai 1996）や、夫婦関係に対する評価と会話時間との間に有意差が認められること（土倉 2005）なども明らかにされている。つまり、夫より妻の方が、夫婦間のコミュニケーションに、双方向的で情緒伝達や共感の側面をより見出し求めていると言えるだろう。

3.3 男女のコミュニケーションの違いと文化・社会的背景

夫婦のコミュニケーション行動を二者関係だけでなく、結婚・夫婦を取り巻く文化・社会的文脈の中で理解しようとする動きもある（平山・秋山

2004)。夫婦間のコミュニケーションを単なる「男女の違い」にとどめず、そこに文化・社会的性差—男性優位の文化・社会的規範や男女の勢力・権力関係など多様な影響が加味していると捉える立場である。

平山・柏木(2001)では、コミュニケーション態度のうち、夫に最も顕著な態度は「威圧」、妻に顕著な態度は「依存・接近」であり、このように夫と妻とが対照的に異なるコミュニケーション態度をとる背景には、性的社会化の影響、男女間の社会的・経済的地位の格差があると推察している。Acitelliら(1993)では、結婚幸福度に対する最も強い予測変数は、妻にとっては自分が夫を理解していることであったのに対し、夫は自分の言動を自ら語ることであったという。つまり、妻の夫への理解は妻の結婚幸福度に寄与するものの、夫の妻への理解は夫の結婚幸福度には寄与しないということである。これは、女性は自己のアイデンティティを他者との関係性に求めると示唆する Gilligan(1982)に通じ、伝統的に人間関係に配慮する者として、妻は夫婦関係を円滑に機能させるために夫を理解するよう求められているともいえる。加えてこの男女差の社会的・経済的背景には、権力が上の者(この場合は夫)は下の者(この場合は妻)を理解する必要性が大きいことが考えられている。そして、妻は夫を理解することによって夫の支配を感じつつ夫の財力を手に入れることで、自分の結婚幸福感が得られるというのである。こうした夫婦間のコミュニケーションに男女の経済格差が反映されていることを裏付けるように、平山・柏木では、妻の経済的地位が高いほど、夫は妻に対して共感的なコミュニケーション態度をとる傾向が明らかにされている。このように、単に「男女ではコミュニケーション態度が異なる」と、男女それぞれの言語文化の特徴を理解し合うことで「誤解」を解消しようという立場から、なぜ女性がコミュニケーションにおいて相手との「関係性」や「共感」を求めるのか、男性が「自立性」や「上位性」を示そうとするのかまで考慮するのならば、文化・社会的文脈の中で男女のコミュニケーションの特徴を解釈する必要があるだろう。

4. 日本における国際結婚夫婦のコミュニケーション

4.1 これまでの先行研究より

日本においては依然国際結婚夫婦に関する研究は少なく、特に夫婦間コミュニケーションに焦点を

あてたものは極めて稀少である。ただし、国際結婚においても、夫婦で共有する時間を十分持ち夫婦が互いを理解する重要性は指摘されている(松本2001)。国際結婚における精神医学的な問題の特徴としても、夫婦間で言語的に十分な意思疎通が図れていないと、問題を単なる文化差として捉え、問題自体の解決が遅延しやすいことが報告されている(大西ら1995)。国際結婚夫婦の場合、同じ母語話者同士の夫婦以上に、量的・質的にも十分な夫婦間のコミュニケーションが求められると言える。

施(2000)は、夫婦間コミュニケーションに比較的重点を置き、夫婦関係満足度に寄与する要因について量的調査を行っている。その結果、夫の婚姻満足度より妻の婚姻満足度の方がコミュニケーション側面によって説明される程度が大きく、夫の婚姻満足度は夫自身のコミュニケーション特性によって規定されるが、妻の場合は、妻自身のコミュニケーション特性以外に夫の言語コミュニケーションへの意欲によっても規定されていた。つまり、国際結婚夫婦においても、自分のコミュニケーション態度にのみ重点を置く夫に対して、妻は自分のコミュニケーション態度に加え、夫との関係性も含んでの満足度となっていることが明らかにされており、夫婦関係に配慮する妻の様子が見て取れる。

その分、言語的に十分な疎通が図られていない場合、夫婦の間で問題の顕在化が遅れ、その問題を一人抱え込むことになるのは外国人妻である。実際、ある精神科外来を受診した国際結婚症例の患者のうち、性別では圧倒的に女性、それも国籍問題や経済的に弱い立場に置かれやすいアジア近隣諸国からの外国人妻が多く、問題の背景には夫婦間のコミュニケーションが不全であることが指摘されている(大西ら1995)。

また、国際結婚家庭における母語の使用状況を調査した山本(2004)では、夫婦間や親子間での使用言語は、関与する言語の社会的、また国際的威信性や有益性に大きく影響を受けて生じている可能性があるとして指摘しており、夫婦や家庭内での力関係は、自分の国で母語でコミュニケーションをとる配偶者の方が有利になりがちである(石河2003)。

つまり、外国人妻、特に非欧米系の女性にとっては、日本人男性との夫婦間コミュニケーションにおいて、母語でない日本語の使用と、日本の文化・社会的性差—男性優位の文化・社会的規範や

男女の勢力・権力関係などという二重のバイアスを受けていることになる。

4.2 国際結婚夫婦のコミュニケーションの展望

佐藤（1989）は、夫婦や家族の問題には価値観が深く組み込まれている「家庭文化」が背後にあるからこそ、それを無視したり否定したりすることには鋭い反発があり、摩擦の多くが日常的であるだけにそこに逃げ場がなく、当事者双方にとって深刻な問題となると述べている。「結婚」が全人格的な様相を帯びている以上、冠婚葬祭などの習慣や食生活、家庭内での家事・育児の分担、妻の就労に対する考え方、親や親戚をはじめ様々な人間関係に対する姿勢、子育てに対する考え方など、生活上のあらゆる価値観、習慣、感情が関わることが問題として上る。その意味で、国際結婚夫婦のコミュニケーション上に浮上あるいは水面下に無意識に潜在している問題もまた、日本のジェンダーや家族問題をも含んでいるといえ、国籍・文化の違いだけでなく、結婚のもつ多層性に触れた議論・研究が求められるといえる。

それと同時に、国際結婚夫婦や家族の場合、鄭（1992）が指摘するように、家族構成員間の帰属意識の相違や国籍差別という外的世界から持ち込まれた権力構造、及び適応度の差からくる異文化間コミュニケーション・ギャップなども、外国人妻を家庭内外の「弱者」に追い込む危険性を孕んでいる。

そのため、外国人妻が日本人夫との間で外国人としても女性としても真に対等で満足感が得られるコミュニケーションが成り立つには、男女のコミュニケーション態度とそこに反映される意識を見直すとともに、それと併せて、外国人妻、特に非欧米系の女性の母語や価値観・習慣等が家庭の内外で尊重される環境作りが必要である。

また、前述の施で指摘された「夫は自己完結型、妻は他者関係型」や、「男性は自分が相手に受け入れられ、認められて頼られていると実感することで、女性は自分が愛され大切にされているという実感がもてることで、それぞれ幸福感が得られる」（Gray 1992）とするコミュニケーション態度の特徴を、単なる男女の違いだとする「文化差モデル」で完結させてしまうなら、女性がなぜ他者との関係の中に満足感やアイデンティティを見出すのか、その文化・社会的文脈に存在する女性の地位の低さや弱さを見落としてしまうことになるだろう。

同じように、外国人ということで、日本人同様の日本語使用と、日本の価値観や習慣を習得するよう強いられることも、「郷に入れば郷に従え」として「仕方がない」と黙認したままであるならば、日本人と外国人が共に対等に暮らせる社会には程遠いだろう。

近年では、このような男女のコミュニケーションの特徴を固定的で本質的に存在するものとして二項対立で捉える「構造主義」に疑問を呈し、ポスト構造主義、所謂「構築主義」によってジェンダーの言語分析に生かす枠組みが新たに提唱されている。

「構築主義」とは、社会の中の知識や個人のアイデンティティは厳然として存在しているのではなく、歴史・社会的に作り上げられており、この過程において言語が大きな働きをしているというもので、ここでいうところの「言語」とは「ことばを使う行為（ディスコース）」である（中村 2001）。馬淵（2002）もまた、人は「権力」があるからディスコースを支配するのではなく、特定のディスコースが「知識」を作り上げ、その「知識」が権力行使を正当化するのだと述べている。

すなわち、男性・女性、日本人・外国人の権力構造は、文化・社会的文脈から個々の夫婦関係に影響を及ぼすばかりでなく、個々の夫婦間におけるコミュニケーション（ディスコース）もまた権力構造を作り上げ、正当化する働きをしているという見方である。女性は最初から柔らかな丁寧な言葉遣いや、他者との関係を重視するコミュニケーション・スタイルをとるのではなく、社会生活を営む中、社会で期待されている話し方を選択して身につけていき、自ら男性優位の権力構造の中に「女性らしさ」のアイデンティティを作り上げているというのである。同様に、夫婦の間で外国人妻のみが夫の言語である日本語を使用し、日本の価値観や習慣に合わせる偏ったコミュニケーションは、結果的に日本人が支配的である社会権力構造の再生産を意味し、日本人と外国人が互いの文化を尊重し合い、対等に暮らせる「共生社会」の構築からは遠くかけ離れてしまう。相手への認識が、男女差や言語・文化差をもって自文化と異なる対峙した存在である限り、相手にもそして自分自身にも内在する多様性や変化の可能性を見落としてしまいがちになる。そして相手に対する「理解」が、単に違いを認めるに留まるならば、互いに変わり歩み寄る機会を失い、ひいては夫婦間の

コミュニケーションに横たわる力関係を固定化させることにつながるだろう。真の「共生社会」とは、相手だけでなく自分自身もまた柔軟に変わりゆく中で、共に新しいものを形成していく社会ではないだろうか。

つまり、より夫婦が対等で幸福感が得られる夫婦間コミュニケーションを目指すには、コミュニケーションを行っている当事者同士の意識と行動の変革が求められる。と同時に、外国人妻の夫婦間コミュニケーションについては、個人の意識の問題にとどまらず、外国人妻を取り囲む社会全体の意識や制度の改革・見直しもまた必要であるといえよう。

5. 今後の課題

本稿では、日本に在住する日本人の夫と外国人妻の国際結婚夫婦のコミュニケーションの相貌を明らかにするための問題背景として、まずその増加の社会的・経済的事情と、外国人妻が日本において抱える諸問題全体を挙げた。そして、日本の夫婦間コミュニケーションに刻印された態度・行動の性差や意識からも、国際結婚夫婦のコミュニケーションの問題背景を取り上げた。外国人妻が日本において共通して遭遇すると思われる問題を扱うことで、外国人妻の全体的な問題を明示することができたと思われる。

しかし今回は、国際結婚夫婦のコミュニケーションについて、その問題背景に止め、問題を直接整理するには至らなかった。また、対象が日本在住の国際結婚夫婦ということから、日本の研究と日本の研究に影響を与えたアメリカの研究を中心にまとめたが、アジア系やブラジル系など、可能な限り母語や国・地域を峻別した研究が今後望まれる。

今後の課題としては、国際結婚夫婦の問題を母語や出身別に分類するとともに、国際結婚夫婦のコミュニケーションについて、直接且つ実際に調査・研究を行うことで、その問題を明らかにしたい。

注

1. 以下、男性では「家事分担」「生活設計」「自分の就労への理解」、女性では「生活設計」「配偶者の就労観」「収入分配・支出管理」の順であった。
2. 平成12年度総務省統計局資料によれば外国人妻の8割余が韓国・朝鮮、中国、フィリピン、タイ出身者である。
3. 入国管理局で用いられている名称に基づく。
4. たとえば、秋武邦佳(1995)「在日を生きる外国人妻たち」『教育評論』vol.581や、桑山紀彦(1995)『国際結婚とストレス』明石書店などがある。

参考文献

- 秋武邦佳(1995)「在日を生きる外国人妻たち」『教育評論』vol.581, 14-17.
- 石河久美子(2003)『異文化間ソーシャルワーク』川島書店
- 大西守・山寺亘・中山和彦 1995 「国際結婚例における心身医学的問題」『心身医学』35(3), 229-233.
- 小澤千穂子(1987)「共稼ぎ夫婦における結婚満足度」『家族関係学』6, 1-6.
- 小田切紀子・菅原ますみ・北村俊則・菅原健介・小泉智恵・八木下暁子(2003)「夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連—縦断研究の結果から」『性格心理学研究』11(2), 61-69.
- 葛慧芬(1999)「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの必要性—中国人花嫁の事例から—」『日中社会学研究』第7号 日中社会学会 146-165.
- 葛慧芬(2000)「国際結婚における「共生」の課題」『金沢学院短期大学紀要「学業」』vol.42, 59-70.
- 神原文子(1992)「夫および妻の夫婦関係満足度を規定するもの」『愛知県立大学文学部論集』41, 37-66.
- 嘉本伊都子(1992)「国際結婚の動向と研究課題—F・ニッタ論文とA・B・コットレル論文の比較検討を通して—」『社会学専攻紀要』16巻 明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻編 231-250.
- 近藤裕(1998)『家庭内再婚—夫婦の絆とは何か—』丸善ライブラリー
- 篠崎正美(1996)「国際結婚が家族社会学研究に与えるインパクト」『家族社会学研究』No.8, 47-51.
- 施利平(2000)「国際結婚夫婦におけるコミュニケーションと婚姻満足度」『ソシオロジ』44(3), 57-73.
- 鈴木淳子(1996)「若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について—就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン—」『社会心理学研究』11(3), 149-158.
- 袖井孝子・都築佳代(1985)「定年退職後夫婦の結婚満足度」『社会老年学』No.22, 63-77.
- 鄭暎恵(1992)「異文化適応と家族—民族と国家のはざまで—」『変貌する家族6 家族に侵入する社会』上野千鶴子他編 岩波書店 176-190.
- 土倉玲子(2005)「中年期夫婦における評価ギャップと会話時間」『社会心理学研究』21(2), 79-90.
- 寺内恵一(1995)「国際結婚への道のりと村の生活への適応—行政の立場から—」『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 移民研究レポート』vol.1, 13-17.
- 中澤進之右(1997)「農山村の結婚難とアジア系外国人妻—山形県最上地方の後継者 青壮年に嫁いだ外国人女性の意識と実態—」『東畑二郎記念研究奨励事業報告23』農政調査委員会, 1-59.
- 長津美代子(1987)「2・30代夫婦の結婚幸福感」『青葉学園短期大学紀要』第12号 75-84.
- 長津美代子・濱田由紀子(1999)「中年期における女性の夫婦間ディストレス」『日本家政学会誌』50(8), 793-805.
- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- 難波淳子(1999)「中年期の日本人夫婦のコミュニケーション

- の特徴についての一考察-事例の分析を通して-』『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』8, 69-85.
- 新田文輝(1995)「最近の日本における国際結婚—接近と交換理論を中心にした試論」『吉備国際大学社会学部研究紀要』5, 95-109.
- パーバラ・H・佐藤(1989)「国際結婚における日本人親族との心理関係」『現代のエスプリ カップルズ』262, 144-153.
- 原俊彦(1996)「国際結婚と国際児の出生動向」『家族社会学研究』No.8, 67-79.
- 平山順子・秋山泰子(2004)「夫婦の職業生活とコミュニケーション」『家族心理学年報 22 家族内コミュニケーション—ところを運ぶことばの力』日本家族社会学会編 p.55
- 平山順子・柏木恵子(2001)「中年期夫婦のコミュニケーション態度:夫と妻は異なるのか?」『発達心理学研究』12(3), 216-237.
- 松田智子(2000)「性別役割分業からみた夫婦関係」善積京子編『結婚とパートナー関係:問い直される夫婦』ミネルヴァ書房 125-145.
- 松本佑子(2001)「国際結婚における夫婦関係に関する一考察—フィリピン妻の意識を中心に—」『聖徳大学研究紀要 人文学部』12, 17-22.
- 馬淵仁(2002)『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会
- 柳田泰典(1990)「共働き夫婦の会話に関する実証的研究」『長崎大学教育学部教育科学研究報告』39, 9-26.
- 山本雅代(2004)「研究課題番号 15652026 国際結婚家庭における母語の使用と子への継承:日本語-非英語家庭の言語使用状況調査」2003-2004 萌芽研究 研究種目コード
- Actelli L.K., Douvan E & Veroff J.(1993) *Perceptions of Conflict in the First year of Marriage: How Important are Similarity and Understanding?* Journal of Social and Personal Relationships, Vol.10, 5-19.
- Bresnahan M. I., Cai D.H. (1996) *Gender and Aggression in the Recognition of Interruption* DISCOURSE PROCESSES 21, 171-189.
- Blood, R O. (1967) *Love match and arranged marriage: a Tokyo-Detroit comparison* 田村健二監訳 1978 『現代の結婚:日米の比較』培風館
- Gilligan C. (1982) *In a Different Voice. Psychological Theory and Woman's Development.* Cambridge: Harvard Univ. Press. 岩男寿美子監訳 生田久美子・並木美智子共訳(1986)『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店
- Gray J. (1992) *Men are from Mars. Women are from Venus.* 大島渚訳(2001)『ベスト・パートナーになるために』三笠書房
- Lafrance M., Brownell H., Hahn E. (1997) *Interpersonal Verbs, Gender, and Implicit Causality.* Social Psychology Quarterly. Vol.60, No.2, 138-15.
- Michel A. *Sociologie de la Famille et du mariage* 有地亨訳 (1978)『家族と婚姻の社会学』法律文化社
- Tannen D. (1991) *You Just Don't Understand: Women and Men in conversation.* Ballantine Books.
- Turner L.H., Dindia K., Pearson J.C (1995) *An Investigation of Female/Male Verbal Behaviors in Same-Sex and Mixed-Sex Conversations.* Communication reports. Vol.8, No.2, Summer, 86-96.

いとう たかえ／山梨大学 留学生センター
 takaiei@yamanashi.ac.jp

The communication issues of intermarriage couples for foreign wives

ITO Takae

Abstract

This paper analyzed the backgrounds behind the communication of Intermarriage couples. As a result, it is needed to change the systems and consciousness of Japanese society, in addition, the communication behavior and thinking of the parties concerned.

【Keywords】 Intermarriage, Gender, Communication

(International Student Center, Yamanashi University)